Chapter 30: **水と岩の過去 Part 2**

サンダースがニヤリと笑いながら言い始めた。「知ってるか、“実は交尾の相性においては──”」

──その瞬間、シャワーズが即座にミュートキーを叩き、慌てて遮った。

「その呪われたセリフ、この神聖な語りの場で言ったら許さないからね……！」シャワーズの顔はブースターの毛より真っ赤だった。

その頃、エーフィは「サイキックプリンセス」というゲーム内ネームでこっそりログインしており、図書館の机から三匹の様子を見て薄く笑みを浮かべた。彼女も、自分の過去を語る時が来たと感じていた。

──

「昔ね、ブラッキー叔父さんとあたしが若かった頃、仲のいい友達がいたの。ヨーギラス。」エーフィはボイスチャットで話し始め、三匹を驚かせた。「その頃は、私たち全員、はみ出し者だった。」

声色が少し懐かしさを帯びる。「ヨーギラスは内気だけど忠実だった。サナギラスに進化した時、他の子たちにバカにされたの。“不細工”、“硬い”、“冷たい”って。でも、ブラッキーも私も、そいつのそばを離れなかった。」

ブースターが尋ねる。「…ブラッキー叔父さん？ なんでお母さんが父さんのこと“叔父”って…？」

（それは血縁じゃない友人関係での呼び方ってことね…）

「彼は星を学んでたの。月に導かれながら。私は日中の光の中で学んだ。そうやって、私たちはそれぞれ自分の強みを見つけて進化したの。」

「サナギラスはその姿を見て、変わって、輝いて──そして、ついにバンギラスになった。」

場の空気が静まる。

「……彼は私を愛してたの。」エーフィは静かに続ける。「でもね、行き過ぎた愛だった。私が優しく接してたからって、それだけで何かを“返す”義務があると思い込んでた。」

三匹は沈黙した。空気が重くなった。

「その頃、カヌちゃん（デカヌチャン）はまだ法学部の学生でね。彼女が味方してくれたの。でも、バンギラスは拒絶された怒りで暴走して、私を誘拐して、自分の子供時代の妄想を現実にしようとした。」

「でも──私は逃げ出したの。ブラッキーの助けもあって。そして…前に進んだ。」

静寂が落ちる。

シャワーズがぽつりと呟いた。「…知らなかった…。」

「多くの人には話してないの。」エーフィの声は優しく続く。「でも今、話すわ。優しさは、命を差し出す義務じゃないって、わかってほしいから。」

──

エーフィは語り続けた。声は静かで、でも確かなものだった。

「その時、ホウオウも空から見ていたの。あの時代でも珍しい存在だったけど──空から、全てを目撃してた。助けには入らなかったけど……忘れてはいなかった。」

──

ゲーム内のメモリーシーンが揺れ、次の映像が浮かぶ。

ピカチュウ。

今のドタバタバカとは別人のように、若くて粗野なピカチュウ。街外れで混乱を起こしていた盗賊団の一員だった。バンギラスに勧誘されて、力と報酬を約束されたから。

「でも、ピカチュウは他の奴らとは違ったの。」エーフィが語る。「バカで衝動的だけど、心はあった。私をさらう計画がエスカレートした時、彼は躊躇したの。見ていられなかった。」

──

ピカチュウは飢えて、路地裏で倒れていた時に、ブラッキーに拾われて救われた──

──そして物語は最初の章へとつながっていく。

──

「そうして、ピカチュウは盗賊団を抜けた。彼はブラッキーに命を救われたの。だから今どんなにアホやっても……私たちを裏切ることは、絶対にしない。」

三匹は沈黙したままだった。

サンダースでさえ、口を閉じていた。

やがてシャワーズが小さく呟いた。「だから……ブラッキー叔父さんはあんなに厳しいんだね。」

ブースターがうなずく。「そんで、母さんがバンギラスに近寄らない理由も……。」

「そういうこと。」エーフィは、あたたかく微笑んだ。